『源氏物語』のリライトと和歌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4686

『源氏物語』のリライトと和歌

中　周子

一、はじめに

与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、田辺聖子、橋本治、瀬戸内寂聴等々……『源氏物語』ほど数多くの現代作家によって再創造され続けている古典作品はないのではなかろうか。中には一度ならず二度三度と原典に挑戦する作家もいる。作家たちは、平安時代の物語を、自らが生きた時代の現代小説とすべく様々な工夫をこらしている。しかし、『源氏物語』の和歌のみは（現代語訳を付すなどして）原文のまま用いている。

その中で、田辺聖子の『新源氏物語』が、原典の和歌の約四分の三を、独白や会話や心情描写に書き換えたり、あるいは削除したりしていることは画期的である。

『新源氏物語』の約二十年後に、『源氏物語』の現代語に取り組んだ瀬戸内寂聴も従来通り和歌を原文で記し、現代語訳を五行詩の形式にして並記している。また橋本治の『窯変源氏物語』は光源氏を語り手とする斬新なリライト本であるが、原典の和歌を現代仮名遣いに直し、また一部の古語を現代語に置き換えながら、原典の和歌をすべて用いている。さらに、引歌をも作中人物の和歌として取り込んでいる。『源氏物語』の和歌を重視するという点においては、従来の現代語訳の路線を踏襲しているといえよう。『新源氏物語』における和歌の扱いがいかに異色であったかが分かる。

『新源氏物語』の斬新さは和歌の扱いに留まらない。原典の構成も大幅に改変されている。加筆された箇所や、改変された部分、原典離れの側面については数々の研究が行われてきた。[1] しかし、なお、『新源氏物語』が原典を如何にリライトしたか、その方法は、未だ充分に解明されてはいない。

『新源氏物語』の刊行直後に、田辺聖子は「古典を現代に橋渡ししたい」との願いを語り、「手引きをする側には責任があってきちんと原典をくみとらなければなりません」[2]と語っている。近年、隆盛を極めている大胆なリライト本の先蹤であるという評価[3]が定ま

りつつある『新源氏物語』であるが、いかに「きちんと原典をくみと」っているかという原典を継承する側面の解明もまた、必要であろう。

本稿は、『源氏物語』の和歌の扱いに注目して、原典のどの和歌を残し、またどのように活かしたのかという観点から、『新源氏物語』における原典のリライトの具体相について考察する。

二、『新源氏物語』と『新源氏物語　霧深き宇治の恋』

『新源氏物語』の執筆は長年にわたっている。『新源氏物語』の初出は、「週刊朝日」で、一九七四年、十一月号に連載が開始され、一九七八年一月号の「夢にも通え幻巻」までで連載を終えている。[4] 一九七八年十一月から翌年四月にかけて、新潮社より全五巻の単行本として刊行された。その後、一九八五年十月一日発行の「ＤＡＭＥ」第二巻十号に、『新源氏物語　霧深き宇治の恋の物語』の連載が開始された。第一回は「光のあと花匂う若宮の巻」で、以後、一九八七年七月一日発行の「ＤＡＭＥ」第四巻七号までの全二十二回にわたって連載された。しかし、「ＤＡＭＥ」休刊のために、原典の宿木巻までで終わっている。その後の巻を書き下ろして加え、一九九〇年五月に新潮社より『新源氏物語　霧深き宇治の恋』と題して二巻が発行された。従って、光源氏の物語の執筆開始から、匂宮や薫の物語の完成まで十六年間の歳月が経っている。（以後、両者を区別するために、光源氏の死までを描いた『新源氏物語』を「新源氏」、光源氏亡き後の物語である『新源氏物語　霧深き宇治の恋』を「宇治の恋」と略す。）

かつて、『新源氏物語』における和歌の扱いについて、光源氏の妻妾の中で、最も詠作数が多い紫の上の和歌（二三首）をとりあげて、それらが『新源氏物語』にどのように取り組まれているかを考察した。[5] その結果、原典では光源氏との贈答歌が大半を占めていたが、「新源氏」では、二人の細やかな心の交流は、ほとんどが饒舌ともいえる会話に改筆されており、和歌の贈答は一組のみであった。その一方で、秋好中宮との春秋争いの歌は残されているなど、和歌が王朝時代の貴族たちの雰囲気を醸し出すための小道具として利用されているという傾向が見られた。「宇治の恋」でも、原典の和歌を取り込む方法は同様だろうか。

因みに「新源氏」では、原典の和歌が、そのまま用いられたのは二〇パーセントであったのが、「宇治の恋」では三六、四パーセントに増加している。この数字は、「宇治の恋」では和歌により重点がおかれている事を物語っているのではないだろうか。また和歌が、より作品化に有効に機能していることを予測させるものではないだろうか。「宇治の恋」において『源氏物語』の和歌は、如何に取り込まれているか、その方法は「新源氏」と同様であるのか。次に「宇治の恋」における和歌の有り様を追求してゆきたい。

三、『霧深き宇治の恋』の冒頭

まず、「宇治の恋」の冒頭部分を見てみよう。[6]

（――自分はどこから来たのだろう……いったい、自分は誰の子なのだろう……）

青年・薫の悩みは深い。

しかもその悩みを人にうちあけられない。

心に秘めたまま、いままできた。それが薫に神秘な陰影を与え、どことなく、普通の若者とは違った雰囲気を身辺に漂わせている。

薫はとりたてて美青年というわけではない。

しかし、何となくなまめかしいところがあり、表情や挙措に気品が添って、思慮ぶかい、老成した感じを人に与える。世間に人気のある貴公子でありながら、それに傲ることはなかった。薫が世にもてはやされるさまは、そのかみの、父の光源氏の君をしのぐぐらいであったのだが……。

「宇治の恋」は、薫の独白で始まる。物語の冒頭に真っ先に登場する薫こそ、これから始まる物語の主人公である。ところが、原典の匂兵部卿宮巻は薫の紹介では始まらない。「新源氏」が、光源氏の母桐壺更衣ではなく、青年光源氏を登場させることにより始められたことと同手法である。

原典では光源氏の子孫として、まず、冷泉院をあげ、次に明石中宮腹の三の宮（匂宮）と女三宮腹の若君（薫）をあげる。[7]

光かくれたまひしのち、かの御影に立ちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。おりゐの帝をかけたてまつらむはかたじけなし。当帝の三の宮、その同じ御殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二所なむ、とりどりにきよらなる御名取りたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。ただ世の常の人ざまに、めでたくあてになまめかしくおはするをもととして、さる御仲らひに、人の思ひきこえたるもてなしありさまも、いにしへの御響きけはひよりも、やや立ちまさりたまへるおぼえからなむ、かたへは、こよなういつくしかりける。

薫のことを最初には語らないのであるが、匂宮と薫を「この二所なむ」と取り立てて並べて賞賛している。しかし、さらに二人について語るときにも匂宮を先にしている。

紫の上の、御心寄せことにはぐくみきこえたまひしゆゑ、三の宮は、二条院におはします。春宮をば、さるやむごとなきものにおきたてまつりたまて、帝、后、いみじうかなしくしたてまつりかしづききこえさせたまふ宮なれば、内裏住みをせさせ

たてまつりたまへど、なほ心やすき故郷に、住みよくしたまふなりけり。御元服したまひては、兵部卿宮と聞こゆ。

匂宮に続いて、女一宮と女二の宮、大殿（夕霧）の御女、光源氏の妻妾たちの様子が語られる。その後にようやく若君（薫）の元服の様子と、女三の宮の念仏三昧の日々が語られ、出生の秘密に感づいて悩む薫の和歌が置かれている。

そして、生まれながらにして芳香を身にまとう薫に対抗意識をもち、薫香に凝る匂宮を描く。巻名を「匂兵部卿宮」という所以である。また、夕霧は娘を薫か匂宮に縁組みさせたいと考えるなど、匂宮と薫は常に対照的に描かれている。これから語り出される光源氏亡きあとの物語の主人公は、匂宮と薫の二人であることが窺われる。

原典では、登場も紹介も匂宮の後であった薫を、「宇治の恋」では最初に登場させているのである。冒頭に描かれた薫の独白「――自分はどこから来たのだろう……いったい、自分は誰の子なのだろう……」は、次の薫の和歌によっている。

おぼつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ

この独詠歌に詠まれた薫の悩みは、女三の宮の日常を描く場面においても「出来るものなら薫は、母宮に取りすがって（お教え下さい。私は誰の子なのですか。私はどこからきたのですか）とかきくどいて尋ねたい」とくり返される。さらに「いったい、なんの因果でこんな悩みを持った身に生まれついたのか」という心内語の後に、和歌が置かれている。「おぼつかな……」の和歌は「宇治の恋」において、あたかも主旋律のようにくり返されて、薫を形象する上での核となっているのである。

四、浮舟の和歌

「宇治の恋」の和歌の扱いを考察するにあたって、後編のヒロインである浮舟の和歌を取り上げたい。原典では浮舟の和歌は二六首ある。東屋の巻以降にしか登場しないにもかかわらず、『源氏物語』の女君の中で、最も多くの歌を詠んでいる。因みに、後半の主人公である薫の五七首よりは少ないが、匂宮の二四首よりも多い。

原典において浮舟はどのような折に、誰に宛てて和歌を詠じているのかを、「宇治の恋」と比較してまとめると次のようになる。（）内に「宇治の恋」では原典の和歌がどのような形に書き換えられたかを示す。また＊は手習歌にも分類（重出）する歌数を示した。

・手習歌…一一首
（九首…和歌、一首…手紙文、一首…省略）
・独詠歌…四首
（三首…心中描写、一首…省略）
・匂宮への返歌…六首

（四首…和歌＊三首、一首…会話、一首…手紙文）
・母親への手紙…三首
（一首…和歌、一首…手紙文）
・薫への返歌…二首
（一首…和歌、一首…会話）
・尼君への返歌…一首
（一首…会話）
・小野の中将への返歌…二首
（一首…会話、一首…手紙文＊一首）
・中の君に贈った正月の卯槌に添えた歌…一首
（一首…和歌）

贈答歌が過半数で、贈答相手は匂宮が最も多い。薫との贈答は、宇治での逢瀬の場面でのやりとりと、京からの文に返事した二度のみである。歌数だけを見れば、薫との贈答歌は小野の中将との贈答歌と同数である。浮舟と匂宮との結びつきの深さが窺える。

また、独詠歌・手習歌が半分近くを占めている。ことに浮舟の手習歌は古来注目されて、「海河抄」以来「手習の君」とも呼ばれている。[8] 手習は巻名ともなっており、手習巻には口に出せない悩みを、紙に書き付ける浮舟の姿がくり返し描かれる。

浮舟は「思ふことを人に言ひ続けむ言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいてなつかしくことわるべき人さへなければ、ただ硯に向かひて、思ひにあまるをりは、手習をのみ、たけきことにて書きつけたまふ」姫君として造型されているのである。胸に秘めた悩みを語る相手もいない浮舟の唯一の慰めが「手習歌」である。原典においては、和歌なくしては生きていけない女君として形象されているのである。

「宇治の恋」では、原典の浮舟の和歌二六首のうち一四首が、そのまま和歌として用いられている。会話・手紙に書き直された和歌が七首。また心中描写などの人物描写に活かされた和歌が三首。二首は省略されている。

手習歌を心情描写にせずに、そのまま用いているのは何故であろうか。また、匂宮との贈答歌は、会話化されるよりも和歌として残される方が多く、尼君や中将との贈答歌はすべて会話に置き換えられているのは何故だろうか。

次に、浮舟の和歌がどのように作品に組み込まれているかを具体的に考察してゆこう。

五、散文化された和歌

まず、田辺聖子の独自の手法として注目されている、和歌を散文化した例から見てゆこう。原典の和歌を心理や行動を描写する一文に書き換えた箇所である。原典と「宇治の恋」を比較してみよう。

次は、手習巻の一場面である。

・月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひいで

つつ、さまざまの物語などするに、いらふべきかたもなければ、つくづくとうちながめて、

われかくて憂き世の中にめぐるともたれかは知らむ月の都に

・月の明るい夜には、妹尼たちは興のおもむくままに歌をよんだりして楽しみ、昔の都での花やかな暮らしを思い出して、さまざまの昔がたりをする。浮舟は返事のしようもないので、ひとりもの思いにふけっていた。自分がこんな風に、辛い浮世にまた生還したということを、都では誰も知る人はないだろう。

小野の山里で、横川の僧都の妹尼たちと暮らす浮舟の日常を描いた場面である。原典の浮舟のつぶやきの様な和歌が、「宇治の恋」では浮舟の心中描写となっている例である。また、次も同じ手習巻の一場面で、やはり小野の山里での物思にふける日々を描いた場面である。

・夕暮れの風の音もあはれなるに、思ひ出づること多くて、

心には秋のゆふべをわかねどもながむる袖につゆぞみだるる

・夕暮れの風の音も哀れに、浮舟は思い出すことも多く、涙ぐまれるのだった。

「宇治の恋」では、原典の和歌が「涙ぐまれるのだった」という一節に凝縮されている。思い切った書き換えが行われている例である。

また、手習巻では、尼君の亡き娘の婿であった中将が登場し、浮舟に思いを掛けて何度も和歌を読みかけてくる。浮舟は取り合わず、かわって尼君が返歌するのであるが、原典では浮舟が二度返歌している。とはいえ、浮舟が「わざと言ふともなき」つもりで、思わず口にした和歌「憂きものと思ひも知らですぐす身をもの思ふ人と人は知りけり」や、いつもの癖でつい紙端に書き付けた「例の手習にしたまへる」和歌「心こそうき世の岸を離るれど行方も知らぬあまの浮木を」、それらを女房が中将に伝えたり届けたりすることで、贈答が成立した体である。

一方「宇治の恋」では、浮舟と中将のやりとりは描かれるが、そこに原典の和歌は用いられてはいない。

・「山里のあわれも分らぬ身、物思いなんてわたくしにはありませんわ……あなたのお話し相手にはなりますまい」ことさら返事をしたというでもなく、ひとりごとのようにいう……。

・「心は浮世の岸を離れましたけれど、さあ、行く末はどうなりますことやら」とちょっとした紙の端にかきつけた。少将の尼はそれを中将に送った。

このように、原典においては、中将に贈られたのは詠じた和歌と手習いの和歌であったが、「宇治の恋」では、ただ「ひとりごとのよう」なつぶやき、そして紙の端に書きつけた一文に置き換えられている。

ところが、浮舟にかわって中将とやりとりする尼君の和歌は、「宇治の恋」でも残されている。浮舟が、中将と和歌の贈答をしないことと対照的である。

原典では、浮舟は尼君とも贈答を交わしているが、その和歌も「宇治の恋」では会話文に置き換えられているのである。原典の手習巻の、雪深い新春に子の日の若菜をめぐる、浮舟と尼君とのやりとりを、「宇治の恋」の同じ場面と比較してみよう。

・若菜をおろそかなる籠に入れて、人の持て来たりけるを、尼君見て、

山里の雪間の若菜摘みはやしなほ生ひさきのたのまるるかな

とて、こなたにたてまつれたまへりければ

雪ふかき野辺の若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべき

とあるを、さぞおぼすらむ、とあはれなるにも、「見るかひあるべき御さまと思はましかば」と、まめやかにうち泣いたまふ。

・正月の子の日は、雪間に萌え出た若菜を摘んで人に贈るならわしがある。長寿を祈るやさしい心からであった。若菜を粗末な籠に入れて贈ってくれた人があり、妹尼は、

「縁起物ですからね……このお祝いはあなたにね。行く末長いひとに」

と浮舟にみせた。

「いいえ、尼君さまこそ、長生きなすって下さいまし。わたくしも元気で生きてゆくつもりですけれど」

と浮舟はほほえむ。尼君は、これで世の常のように浮舟に花やかな美しい衣装を着せ、幸せな結婚をさせたらどんなに心のゆくことであったろうにと思うと、浮舟の出家がいつまでも悲しかった。

このように、浮舟の尼君との贈答歌は日常的な会話に置き換えられている。「宇治の恋」においては、蘇生後に小野の山里で暮らす浮舟は、言葉少なに日常の会話をすることはあっても、誰とも和歌を詠み交わさない女君として描かれているのである。

その一方、「宇治の恋」において、原典に「手習歌」と記される浮舟の和歌は十一首中の九首までが和歌として用いられているのは、何故であろうか。次に手習歌について見てゆきたい。

六、手習の和歌

「手習」は元来は書の練習、古歌を書き写すなど、いわば習字の

ことである。夕霧巻には「君達のあわて遊びあひて……書読み、手習ひなど、さまざまにあはたたし」と、本来の意味で使われている例もある。しかし、その他の例は心に思い浮かぶことを書きすさぶことをいう場合が多い。『源氏物語』には二二例の用例[9]があり、一〇例が浮舟の歌についての記述である。さらに巻名ともなっていることから予測されることではあるが、手習巻に六例が集中している。古来、浮舟が「手習の君」と称されることも頷けよう。内容的には独詠歌と同じに見なされることもあるが、ここでは、書かれたことの明確なもの、とくに「手習」と記されている歌で、「宇治の恋」でも和歌として組み込まれた九首（「いさよふ波に行方知られぬ浮舟の巻」に三例、「物思う人の手習の巻」に六例）七場面を取り上げる。原典と比較しながら順次みてゆきたい。

①最初の例は匂宮との贈答歌である。薫によって宇治に据え置かれた浮舟のもとに、匂宮が薫と偽って忍び込み、浮舟と契りを結んでしまう。次は、その翌朝の場面である。

・硯ひき寄せて、手習などしたまふ。いとをかしげに書きすさび、絵など見所多く描きたまへれば、若きこちには、思ひも移りぬべし。「心よりほかに、え見ざらむほどは、これを見たまへよ」とて、いとをかしげなる男女、もろともに添ひ臥したる画を描きたまひて、「常にかくてあらばや」などのたまふも、涙落ちぬ。

長き世を頼めてもなほかなしきはただ明日知らぬ命なりけり

匂宮が手習に興じて、和歌を書き絵を描く。その美しい水茎の跡と興趣あふれる絵を眺め、情深い言葉を聞きながら、浮舟は次第に匂宮に惹かれてゆく。そして、匂宮が「濡らしたまへる筆を取りて」浮舟は返歌を書き付ける。この返歌は「宇治の恋」では次のように書かれている。

浮舟は宮が、墨を含ませられた筆をとって

〈心をばなげかざらまし命のみさだめなきよと思はましかば〉

と書いた。

人の命は明日知れぬもの、とお悲しみになりますけれど、じゃ、人の心はどうなの？宮さまのお心も、変わるのではありませんこと？明日知れぬと言うのは、お心のはかなさ、たのみがたさだわ……。

浮舟の心が匂宮に傾いてゆくきっかけの手習いは「宮は……手すさびに筆をはしらせられる」とあって、「手習」とは書かれていない。しかし、手習歌によって交わされている浮舟と匂宮との初めての贈答歌を、「宇治の恋」もそのまま和歌の贈答として描くのである。

②匂宮と浮舟との恋が最高潮に達する場面。匂宮に連れ出された

浮舟は、雪の月明かりの中を柴舟で宇治川を渡り、対岸の山荘で誰を憚ることなく思いのままの二日間を過ごす。そこでも匂宮は「…あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ」のである。浮舟は、我知らず思わず薫と匂宮との間で迷う心を書きつけてしまう。「宇治の恋」では次の通り描かれる。

「雪、氷を踏み分けて、それでも道に迷いもせずに来たよ。あなたには迷ったが。

〈峰の雪みぎはの氷踏みわけて君にぞまどふ道はまどはず〉」

粗末な硯をお取り寄せになり、たわむれ書きをなさる。

「雪……それよ、わたくしは。雪みたいにあわあわと、空の中ほどで消えてしまうんですわ……」

浮舟は筆を把って、

〈降りみだれみぎはに氷る雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき〉

と書いたが、恥ずかしくなって消した。

①②の逢瀬の場面では、いずれも「手習歌」による贈答の様子が描かれている。手習歌を書くことが、浮舟にとっては匂宮との思い出につながる行為として描かれているのである。

③匂宮と薫の二人から前後して文が届いた時、事情を知る女房に匂宮への返事を先にと言われて、返事を書きあぐねた浮舟は「今日はえ聞こゆまじとはぢらひて、手習」の和歌を書きつける。そして「宮の描きたまへりし絵を、時々見て泣かれけり」とある。浮舟の心は薫から匂宮に移っているのである。「宇治の恋」では次のように書かれてる。

「今日はとても書けないわ」

と浮舟は恥ずかしがって、手すさびに書きならす。

〈里の名を我が身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き〉

（ところは宇治、わたくしの運命もをのまま「憂し」……人生でこんな辛い思いをするなんて）

手すさびに歌を書きつける行為は、匂宮の手習歌と絵を思い出させ、宮への思いを募らせてゆく結果となる。浮舟の手習歌は匂宮との思い出と切り離せない所業として描かれるのである。「宇治の恋」では「手習」という語は、まだ使われていない。「物思う人の手習の巻」になってから使用されるのである。

次に手習巻の例を見てゆこう。この巻には何度も手習歌を書きつける浮舟が描かれる。

④山里の秋、松風の吹く月の美しい夜のつれづれに、尼達は琴や琵琶を弾きならす。その雅な様子につけても、浮舟は昔の暮らし、死ぬほどの苦しみを味わった日々を、雅な遊びなどをする余裕もなく暮らしていたことを恥ずかしく思い出し、「なほあさましくもの

はかなかりけると、われながらくちおしければ、手習に」と、手習歌を書きつけるのである。この歌は、「宇治の恋」でも次のように書かれている。

「(……わたくしのような取り柄のない田舎者、やっぱり死んでしまったほうがよかったのだ…)

浮舟はそう思いつつ、手習に書き散らした。

〈身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけてたれかとどめし〉

—涙川の早瀬に身投げした私。なぜまた救われてしまったのか……助けられたことを感謝すべきであろうけれど、浮舟は情けなかった。これからどうなるのだろうと、わがみながらうとましい。

尼君たちとの暮らしの中では、とりとめない会話をかわすことはあっても、決して本心を明かせない浮舟である。手習歌は嘆きに満ちて暗い。浮舟の口にも出来ない苦しい胸の内を吐露する唯一の手段だったからである。

⑤尼君たちが初瀬詣でに浮舟を誘う。初瀬は、母と共に良縁を祈りに詣でた記憶が蘇る。その甲斐もなく、薫と匂宮との間で死ぬほどの苦しみを味わったことに思いは移り、手習に気を紛らわすのである。原典では「はかなくて世にふる川の憂き瀬にはたづねもゆかじ、と手習にまじりたるを…」とある。「宇治の恋」でも「浮舟は手習いの紙に書きつけていた」として和歌が記されている。

⑥尼君の留守中に、横川の僧都に懇願して浮舟は出家する。しかし、出家の翌朝も苦しい思いは断ち切れず、手習に書きつける。

…思ひあまるをりは、手習をのみ、たけきことにて書きつけたまふ

「なきものに身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらに捨てつる

今はかくて限りつるぞかし」と書きても、なほみづからいとあはれと見たまふ

限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな

この時の和歌も二首とも「宇治の恋」には残されている。

もともと思うことを人にはきはきと言えない性分なのに、ましてや親しく話せる相手もいない環境だから、浮舟は自分の感慨を筆のすさびに書くしかなかった。

〈なきものに身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらに捨てつる〉

すべては終わった——と書いて浮舟はわが歌にじっと目をあてていた。自分の身も愛する人も亡きものに思い、一度は捨てた世だった。それをまた、再び捨てたのだ。

〈限りとぞ思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな〉

同じような歌を書き散らしているところへ、中将の手紙がきた。

ここでは、二首目の和歌は「同じような歌」として、歌意は記されていない。手習歌を提示することに主眼があるためであろう。

因みに、この直後、原典では中将の手紙に手習として書いた歌が女房によって中将にとどけられてしまう。しかし、前述のように、「宇治の恋」では、中将への返歌となってしまう手習歌のみ、手紙文に書きかえられているのである。中将に対しては和歌を詠まないことで、終始拒否の姿勢を崩さない浮舟として描かれているのである。

⑦出家後も、匂宮の思い出に囚われて平静ではいられなくなる時、浮舟は勤行の合間に手習に心を慰める。原典と「宇治の恋」の同じ場面を比較しておこう。

・年も返りぬ。春のしるしも見えず、氷りわたれる水の音せぬさへ心細くて、「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひ果てにたれど、なほそのをりなどのことは忘れず。

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき

など、例の、なぐさめの手習を、行ひの隙にはしたまふ。

・年も改まった。

雪に埋もれた山里は春のしるしもみえず、凍りついた谷川は水音さへしない。雪氷に閉じ籠められた浮舟は、おのずと、宇治のことを思い出さずにいられない。

川を舟で渡って対岸の小さい邸へ、宮に連れられていったこと。夢うつつのあの二日間。輝かしい無思慮の愛の二日間。すべての人生、すべての情熱を凝縮したような、めざましい恋の愚行の二日間。

宮への思慕はもうないけれど、あの二日間の思い出はいまも浮舟の胸に時折、顕ってくる。

〈かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき〉

と浮舟は勤行のひまひまに、心やりの手習いの歌を書きつけた。

都から遠く離れた静かな山里暮らしの中でも、断ち切ろうとしてもなお、心中に沸々とわいてくる匂宮との逢瀬の記憶。その苦しい幻想に絶えられなくなるとき、浮舟は我知らず手習いをしてしまうのである。手習歌は誰にも心中の悩みを口にすることができない孤独な浮舟の唯一の慰めである。しかし、皮肉なことに手習歌は匂宮の思い出と強く結びついている。決して断ち切れない苦しみと迷いが、浮舟の手習歌には色濃く顕れており、手習歌によって浮舟が造型されているといっても過言ではない。

和歌を会話化することが多い「宇治の恋」において、手習の歌は

ほとんど原歌のまま活かされているのは、手習歌が浮舟造型になくてはならないものであるという、原典への深い理解に基づいている。

例外的に一首だけ和歌として用いなかった手習歌は小野の山里での中将との贈答歌の体をなす手習歌である。「宇治の恋」においては、手習歌は、匂宮との恋と、浮舟の感慨を詠じたものに限って残されたのである。「宇治の恋」は無条件に手習歌を残したのではないことが分かる。浮舟の苦しみと孤独感を描き出すという役割を担わせて、「手習の君」と称された浮舟像をより一層、際だたせているのである。

七、おわりに

いうまでもなく『源氏物語』は和歌文学との関わりが深い作品である。散文の基盤となった夥しい先行歌や引歌はさておき、登場人物の詠作だけを数えても七九五首の和歌が含まれている。平安後期に編まれた十巻の勅撰和歌集『金葉集』や『詞花集』の所収歌を超える歌数である。それらの和歌―登場人物の関係を表す贈答歌や登場人物の心理を描写する独詠歌や手習歌等は、登場人物の造型に重要な役割を担っている。

本稿で取り上げた浮舟は、『源氏物語』の登場人物の中でも、殊に和歌によって特徴づけられて造型された女君である。登場する巻は少ないのに、物語中の女君の中で最も多くの和歌を詠んでいる。全ての登場人物の中でも、光源氏、夕霧、薫についで、四番目に多い。しかも、歌数の四二パーセントが独詠歌であるということは、他に例のない数値である。薫の三〇パーセント、光源氏の二三パーセントをゆうに超えているのである。[10]

自らの真の思いを他者に伝える術を持たなかった浮舟は、ついに、安住できる場所も、心を許す人間関係も結べない。手習歌は浮舟の孤独の中に解決することない苦悩を閉じこめる行為であった。このような、原典の浮舟造型における和歌の重要性を、「宇治の恋」は深く汲み取っている。「宇治の恋」で、原典の浮舟の和歌二六首から一四首を選んで残しているが、そのうち九首は手習歌であった。原典における手習歌の役割を一層明確にし、浮舟詠の特徴を際だたせようという意図が読み取れるのである。

以上、「宇治の恋」の浮舟の和歌を取り上げて、いかに原典の和歌による人物造型の方法を踏まえ、さらに徹底させているかを見てきた。

改変の多さが注目される「新源氏」であるが、そのリライトの方法は、さらに詳細な原典との比較分析を通じて究明される必要がある。

注

(1) 吉井美弥子「田辺聖子と古典文学」『国文学解釈と鑑賞　別冊　田辺聖子』(至文堂、平成一八年七月)等。なお同誌所収の川原塚瑞穂「田辺聖子参考文献目録」が詳しい。

(2) 岩波「波」平成二年五月号「理想を追い求める恋人たち」(新

潮文庫『霧深き宇治の恋』下巻の解説に再収）による。

（3）北村結花「夢見る頃を過ぎても―田辺聖子『新源氏物語』論―」（「国際文化研究」一四号、平成一三年二月）が『新源氏物語』を源氏物語の翻訳史上に「ビックバン」と位置づけた。

（4）田辺作品の書誌については、浦西和彦著『近代文学書誌大系3　田辺聖子書誌』（和泉書院、平成七年一一月）による。

（5）拙稿「『新源氏物語』の挑戦―和歌の扱いをめぐって―」（「樟蔭国文学」第四六号、平成二一年三月）

（6）『新源氏物語』の本文は『田辺聖子全集』第七、八巻（集英社）による。

（7）『源氏物語』の本文は、石田穣二、清水好子校注『新潮日本古典文学集成　源氏物語』（新潮社）による。

（8）小町谷照彦「手習の君浮舟」『源氏物語作中人物論集』（勉誠社、平成五年一月）

（9）用例の検索は、伊井春樹編CD―ROM『角川古典大観　源氏物語』（角川書店）を用いた。

（10）後藤祥子「手習いの歌」『講座源氏物語の世界　第九集』（有斐閣、昭和五九年一〇月）に指摘されている。